

先週の礼拝メッセージ(2021年11月14日：子供祝福礼拝) ベン牧師

「伝えるべきこと」 申命記 6:4-7

今日の箇所は、新訳聖書で、イエス様が律法学者から「一番大切な戒めは何ですか」と問われた時に、引用されたみことばです。

今でも、ユダヤ人はこの戒めを大切に6、7節にあるように親から子へと教え継がれています。親として、あるいは大人のクリスチャンとして、子供たちに何を教えなければならないかを聖書は明確に語っています。それは神を愛することです。

教会では、子供たちに「神様を信じるように」という表現で語られますが、ここでは「愛するように」教えよと語っています。

もちろん、信じなければ愛することもできないのですから、全く切り離して考えることはできません。しかしあえて言葉を選んで言うなら、子供達に繰り返し教えるのは「神を愛しなさい」ということなのです。それも単に愛しなさいではなく、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」つまり、全身全霊をもって神を愛せよと命じられているのです。なぜ、信じるではなく、愛するのでしょうか。

親子関係を例にとってみましょう。親の言いつけを守る子供には二通りあります。親がうるさいから仕方なく、嫌々守っているというのと、親が大好きで、自分のことを愛してくれているのを知っているからか守るというものです。言いつけを守るということでの結果は同じであっても、根本的な差があります。前者は守ることがストレスで、怒りにさえ発展します。しかし後者はストレスどころか親の喜びが自分の喜びとなるのです。

決められているから、命令だからではなく、私たちが神を愛し、神に喜ばれたいからという思いから出発するなら、ストレスにも重荷にもなりません。「神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。」(ヨハネの手紙 1 5:3 新改訳)



愛するとは、相手を思う気持ちからの行動であって、時間や労力を使うことは全く重荷とはならないのです。反対に、義務感からの行動は、たとえ良い行いであってもそれはストレスとなってしまいます。

このことは、信仰だけでなく私たちの生活全てに関わってくるものではないでしょうか。

そこで問われるのは、私たちはいつも愛から行動できているのかということです。いつも喜んで、愛をもって笑顔で行動できるのかと問われれば、様々なことで疲れて倒れそうになったり、頭でわかっているけどできない、あるいは愛するより今は愛されたいんだ、と思う時だってあることは事実です。それでも頑張れと言われると、それこそ義務感からとなりストレスが溜まってしまいます。



こんな私たちの弱さをご存知の神様が、神を愛しなさいと私たちにおっしゃるのです。なぜか、それは神様がまず私たちを愛してくださっているという大前提があるからです。しかも神の愛は、1コリント 13章に記されている愛です。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。…」この愛という言葉を「私」に変えて読んでみると、恥ずかしさのあまり読み通すことはできません。しかし、「イエス様」と読むと、すんなりアーメンということが出来ます。つまり私たちは、どんなに愛があるといっても不完全で限界があるのです。しかしイエス様の愛は完全で、どんな時にも注がれており、しかも決して私たちが裁くことはなさいません。疲れて倒れて起き上がれない時、私のところに来なさい。休ませてあげると呼びかけ、招いてくださいます。(マタイ 11:28) そんな時は休んでいいのです。

私たちが愛し、受け入れてくださる存在を知る時、私たちの心は平安で満たされます。そして、イエス様の御腕が、私がこれ以上落ちないようにと支えてくださるのです。

「人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる。」(詩篇 37:24)

人は倒れる時はあるのです。しかし、必ず主がここでストップとその手をとらえてくださいます。また別の箇所には、「下には永遠の腕がある。」(申命記 33:27 口語訳)と表現しています。

この神の腕があるということを知っているかそうでないかでは、人生が変わってきます。神の愛の腕を覚えながら歩いていきましょう。そして、次の世代へと語り継ぎましょう。

神を愛しなさい、なぜならあなたは神に愛されているからだよと、私たち自身が感謝にあふれ語りましょう。